

世界臨床検査通信シリーズ-36 臨床検査に関する団体の活動

国際検査血液学会(International Society for Laboratory Hematology, ISLH)

一般社団法人日本検査血液学会理事長
川崎医科大学検査診断学

通山 薫

国際検査血液学会 (ISLH) は、検査血液学 (laboratory hematology) に関する情報を集約・共有し、それらを世界に向けて発信する国際学術団体として 1992 年に設立された。年 1 回各国持ち回りの学術集会と学会機関誌 International Journal of Laboratory Hematology (IJLH) の定期刊行を通して、オリジナルな研究発表に加えて、血液検査標準化に向けての情報発信や重要な提言などを行い、今日に至っている。わが国からは大阪市大・巽典之先生 (故人) が初期の頃から精力的に参加され、次第に国内でも ISLH の日本版を構築する機運が高まって、2000 年に日本検査血液学会 (JSLH) が設立されたのは周知の通りである。

ISLH は血球計数、血球形態、止血・血栓等各領域の病態から臨床検査とその標準化など広範にわたる、かつグローバルな学究的あるいは実学的探求を通して実臨床に貢献することをポリシーとしている。各国の検査血液学団体が代表を ISLH に送っており、わが国からは日本検査血液学会理事長が ISLH の Councilor を務めている。ところで国際血液学標準化協議会 (International Council for Standardization in Haematology; ICSH、詳細は別稿を参照されたい) は、元々 WHO の指導下で血液検査の標準化活動を展開してきたが、その後 ISLH の標準化作業部会として再編成され、血液検査に関する重要なドキュメントを次々と IJLH 誌上で公表してきた。

ISLH website (<https://www.islh.org/web/index.php>) は情報満載であるが、とくに啓発的・教育的コンテンツに力を入れている。「Inventory of Guidelines」には重要なガイドラインや付随情報が整然と掲載されており、また「Education」のページには Webinars のアーカイブが並んでいて、いつでも視聴可能である。

筆者が ISLH に関わりを持ち始めたのは 2017 年 5 月の学術集会 Hawaii 大会からで、そこでの協議を経て同年 7 月札幌にて開催された第 18 回日本検査血液学会学術集会 (家子正裕大会長) の際に ISLH の Catherine Hayward 理事長ならびに Tracy George 副理事長を招聘し、ISLH/JSLH Joint Symposium の初開催が実現した (血球形態学と DIC の 2 セッション)。同年には ICSH 会議が神戸で開催されたこともあって、日本の臨床検査関連企業の多大な寄与とともに国際検査血液学におけるわが国のプレゼンスが次第に向上しつつあると思われる。翌 2018 年の ISLH 学術集会は Brussels にて、今年は Vancouver で開催され、口演、ポスター合わせて約 400 演題の発表があり、盛況であった。

このところ日本からは 10 演題内外の発表がなされているが、さらなる増加と質の向上、IJLH への積極的な投稿を推奨するとともに、日本検査血液学会の委員会活動の格段の国際化を期待したい。